
太陽が見える街

新城寺ハヤト

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

太陽が見える街

【コード】

N8015A

【作者名】

新城寺八ヤト

【あらすじ】

舞台は今よりはるか未来の26世紀の日本。第五次世界大戦の影響で汚染物質と太陽の紫外線におびえた人々は地下で暮らすことを余儀なくされてしまう。科学者たちはなんとかして再び人類を太陽の下で暮らせるように試行錯誤する中、ひとつの情報を入手する。「日本に一つだけ太陽の下で暮らしている街がある」この情報の真偽を確かめるためにとある科学者が一人娘を連れて旅立つ

プロローグ

プロローグ

時代は現在から数百年後の地球……

地球の温暖化はもはや温暖化とは呼べなくなるほど深刻なものとなっており、太陽の紫外線は全ての生物を焦がす光線となって地上を滅ぼしていった。

科学者の藤宮正史ふじむらまさふみはこの状況を打破するために街全体を紫外線から守るシエルターを開発した。これにより、紫外線が人々の不安の種となることはなくなったが、彼らは暗く湿ったシエルターの中で人工的なライトの明かりのみを頼りに生きていくことを余儀なくされた。十六年後、人々の不安と不満が絶頂期に達し、溢れだそうとしていた時、一件のニュースが正史の元に入ってきた。

「博士、今日の朝刊はご覧になりましたか」

「ただだが、何かあったのか？」

人々の不満を解消させようと日夜策を練っていた正史の目は夜通し起きていたため赤かった。

「博士、また街の人々のことを考えていたのですね。人のためにがんばるのもいいですが、あなたはもっと御自分を大事になさってください」

科学者の月並みな文句に正史は適当に頷き話の続きを促した。「今日の一面なんです」科学者はそう言っつて新聞を広げる。

「これは……シエルターをはずして十年も無事でいられた街があるだ！どこだ、その街は」

「コンピュータデータベースにアクセスした結果、ここから二百キロ先にある元首都の街だというデータが出ました」

「首都跡か……」

正史は下を向いて考えた。首都跡といえは今もまだ第五次世界大戦の影響で汚染されている場所だ。下手をすれば紫外線以前に、汚

染物質にやられてしまう可能性がある。科学者もそのことをわかっているのか、じつと正史の出す答えを待っている。

「私が現地に行つて直接調べよう」

正史は再び上を向いてそう言った。

「シエルターなしで生きられる技術があるなら私はそれを活用したい」

「しかし、お嬢様はどうなされるのです？まさかお一人にされるつもりでは」

「まさか。彼女も連れて行くさ。今の状況から言つてあまり気乗りはしないが、私はあの子にまだ、太陽というものを見せたことがないからな。出発は三日後にする。それまでにこつちも万全の調査に臨むための準備をすろぞ！」

そして正史は一人娘のあきを連れて、首都跡地行きのトランスポーターに乗った。

太陽が見

える街

STAGE 1

STAGE 1 ～ 出会い

ヴーン……

機械音と共にトランスポーターに人の形が浮き上がっていく。

「ここは……」

シエルターと同じような暗い場所にたせいか、正史は一瞬この情報はガセネタだと思った。

扉が開き、この街の市長とも呼べるような初老の男が入ってきた。「ようこそ、我が街へ。私がこの市長を務めておりますラムル・ハワードです。以後、お見知りおきをお願いします。藤宮正史博士」「こちらこそ。早速なのですが、この街がシエルターなしで十年も生活しているというのは本当ですか？」

「ええ、我々はもう十年間そうしておりますよ。どうぞ、こちらに来てもらえればわかります」

ラムルは笑って頷くと、二人を部屋の外に案内した。そこはかなり前の時代のオフィス風な感じになっており、あきの興味を引いた。「これは……」

正史は窓にかかっているブラインドから漏れる光に驚いた。いくら英知を掛けて作った人口のライトでもこの光だけは真似できない。「このブラインドを開ければ太陽はもうすぐです。その前にこれを一粒飲んでください」

ラムルは二人に固形物質の瓶詰めを渡した。

「これがそちらで言うシエルターの代わりとなるものです」「なるほど……」

探るように小瓶とラムルとを凝視した。正史は瓶のふたを開き、固形物質を一つ手に取った。

「毒ではないようだな」

「当然ですよ。さあ、飲まれたようですのでブラインドを開きますよ」

特に気分を害した様子もなくラムルはブラインドに手をかけようとする。

「待って！」

ここにきてからあきが初めて言葉を交わした。

「どうしました、お嬢さん？」

「あ、あの、私、太陽を見るのは初めてなので……」
壊れそうな声であきはそう言った。

「なるほど、それならゆっくりとブラインドを開けましょう。いいですか、いきますよ」

そう言っただけでラムルはブラインドに手を伸ばす。

「あ、まっ……」

あきが言い終わるのを待たずにラムルはゆっくりとブラインドを開いた。

「うわ！」

あきは反射的に目をつぶった。入ってきた光の量はさほどでもなかったのだが、太陽の光を初めて目にするあきにとってはそれでも眩しいくらいだった。

「なんてこった……」

正史はあまりの出来事に目を丸くし、口もこれでもかというくらい空いている。目の前では建物の通りを歩く人々の姿が見えた。

「どうです？噂でも何でもありません。もちろん、スクリーンによる映像でもない。すべて真実です」

ラムルは特にどこかを強調するわけでもなく淡々と言った。

「お嬢さん、ゆっくりと、目を開けて御覧なさい」

ラムルはあきに優しくつぶやき、彼女の顔を覆っている両手をゆつくりはがした。

「！」

あきは窓の外の光景を目にして、父と同じように固まった。

「やれやれ、親娘おやめで同じ反応ではおもしろくないですね」

ラムルはわざとおどけた調子で言った。実際は二人の反応を見られて満足といった顔である。

「この薬をこれから一週間は毎日朝に一粒。それ以後は四日に一粒飲んでください」

「ラムルさん、少しお話を聞きたいのですがいいでしょうか」

「ええ、もちろん。では、向こうの応接室に行きましょう」

「お父さん……」

あきは不安そうに正史の顔を見上げた。

「お父さんたちはしばらく仕事の話に入るからあきは初めての外を散歩してみたら良いんじゃないかな？ シェルターのライトとは違う自然のライトをゆっくりと楽しんでおいで」

「う、うん……」

あきはばつ悪そうに頷いた。

「ここから数十メートル離れた公園に行ってみるのはどうでしょうか？ なにより近いですからお父さんのお話が終わればすぐに向かえにいけます」

「わかりました」

あきは素直に頷くと正史に「いつてきます」と告げた。

「ああ、気をつけて行っておいで」

あきは正史に「大丈夫」と付け加え、浮き足で外に出て行った。

（あのおじさんが言うには、ここから数十メートルのところにあるのよね。まあ、公園だから目立つし、すぐにたどり着けるよ）

建物の外に出たあきは初めてお使いに行く子供のように緊張感を持ちながら街の中を歩いた。

（なんだか日本じゃないみたい。明るくて温かくて、それに風がすごく気持ちいい。シェルターの中にいるのとはぜんぜん違う）

あきはシエルターの中あの独特の湿気を思い出した。昔の日本はそのくらい湿気が多かったらしい。

チチチ……

あきの視線が正面の歩道からさえずる小鳥へと移った。

「わあ」

あきは思わず声を漏らした。その視線の先にはきれいに整備された道を歩く老人や犬の散歩をさせている男性や、数え切れない人々がその緑あふれる公園で一時の安らぎを感じていた。あきはそのなかにおずおずと入っていく。ここにいるすべての人の雰囲気を変えないように。しかし、ほとんどの者はあきの存在に気づくことなく安らかな一時を感じ続けていた。

（みんな本当に気持ちよさそうだな。あそこのベンチに座っているおじいさんとおばあさんなんてあまりの気持ちよさに眠っちゃってる）

あきはその光景を微笑ましげに見送りながら広い公園内をゆつくりと歩く。さつきまでは眩しかった太陽も目が慣れてきたのか、もう眩しくなかった。

（ぽかぽかしていて気持ちいい。シエルターの中じゃ、けして味わえない雰囲気だわ）

あきは立ち入り禁止の看板がかかっているにもかかわらず、小さな柵を乗り越え、芝生の中に入った。

（大きな樹。まるで映画や漫画に出てくる運命の大樹みたい）

あきは何を思いついたのか突然木の幹にもたれかかった。

（こうやっていたら運命の人が走ってきたりなんかして……なんてね）

あきはロマンチックにしばらく木にもたれていたが、やがて立っているのが辛くなったのか、その場に腰を下ろした。

「気持ちいい風……なんだか眠くなってきちゃった」

あきはゆっくり目を閉じながらまどろみの中に落ちていった。

「おい、ここは立ち入り禁止だぞ！」

「ひゃー！」

誰かの叱責を受け、あきはまどろみの中から目を覚ます。

ゆっくりと目をこすってもう一度その人物を確認する。どう見ても知り合いではない。

「やば、起きちゃった？あゝごめん、とにかく柵から出てきてよ」

眼鏡をかけた少年はおどけた調子でそう言った。あきはまだ状況が理解できないまま少年の言つとおり柵を出た。

「いやあ、悪かったね」

さっきの厳しい叱責とは裏腹に少年の口調は優しくなった。

「ちよつとむしゃくしゃしてて、公園を歩いてたら立ち入り禁止の札の奥に君がいたものだからつい文句の一つでも叫んでみたくなつて…」

「はあ」

まるでわけがわからない。あきがそう思っている横で少年はべらべらと愚痴を言い始めた。

「こんなご時世だから受験ひとつ受けるのもすごく大変でさ、毎日ほかの学生とトランスポーターの争奪戦で……って初対面の人になんで愚痴なんか言っているんだろ？」

「えっと、私に言われても…」

「そりゃそうだ」

真剣な顔の少年に言われて、あきが真面目に首を捻ると少年はおどけて笑った。そして、ひとしきり笑った後、少年は眼鏡を直しながら言った。

「変なのにつき合わせて悪かったね。むしゃくしゃも晴れたし、僕はもう行くよ」

少年は最後にもう一度ばつ悪そうに「ごめんね」とつぶやくとその場を逃げるように去っていった。

(なんだったんだろ？今の)

あきは頭にはてなを浮かべながらその場を去った。

オフィスに帰ると、ちよつと正史とラムルが外に出てきた。

「おや、あきさん」

ラムルが先に気づいたらしく、あきに声をかけた。

「約束どおり迎えにいらしたところだよ」

正史は「機嫌のようだった。おおよそラムルとの話がうまくいったのだろう。」

「では、私はここで失礼します。新しい住居の鍵はその管理人から受け取ってください」

「わかりました。ラムルさん、また近いうちに伺いますよ」

「はい、楽しみにしております」

ラムルはにつこりと笑うと、建物の中へと消えていった。

「お父さん、私たちの新居ってどこなの？」

「ここから少し歩いたところにあるマンションだ」

「それだったらたぶん公園の近くだね。公園の周りはマンションがいっぱい立ち並んでいたから」

「ラムルさんからもらった地図を見てみると、そのようだね。もしかしたらあきに気を遣ってくれたのかもしれないぞ」

「そうだとうれしいな。あの公園にいるだけですごく落ち着くの」

「そうか。後でお父さんを案内してくれよ」

「うん、いいよ」

親娘はそんな他愛のない会話をしながら自分たちの新居に向かって足を進めた。

あきの予想通り、親娘の新居は公園から五十メートルと離れていないところに建っているマンションだった。管理人から鍵を受け取り、早速部屋へと向かった。

「とうちゃく」

あきはうれしそうに部屋に入る。

「うゝむ、ラムルさんが気を利かせてくれたのはわかるが、二人で住むにはこれは広すぎだな…」

正史は荷物を運びながら苦笑した。

「いいじゃない。広々としていて、なんか自由って感じだよ」

「あき……」

「前の家は洞窟みたいだったから余計にうれしく感じるんだ」

「……………」

「あ、そうでもなかったかな」

悲しそうな顔をする正史を見てあきは慌てて言いつくろった。

「いや、無理をしないでいいよ。実際、あんな家じゃ住みづらくてしょうがないからな」

正史はベランダの窓を開けた。

「あ、いい眺めだぞ。あきも見てください」

「ほんと？」

あきはさつきまでの暗さを吹き飛ばし、ベランダに走った。

「わあ、ほんとだ。見て、人があんなに小さいよ」

「さすが、最上階だけあるな。あき、羽目を外してベランダから落ちるんじゃないぞ？」

「あ、お父さんまた昔のことを言う。もう私は子供じゃないんだからね！」

「ごめんごめん。さて、今日の夕食は外食にしようか。この街の地理を覚える意味もこめてな」

「外食？ やったね！」

「さあ、がんばって残りの荷物を片付けよう」

正史はあきの肩を軽く叩き、リビングのほうへと消えていった。

チチチ……………」

小鳥のさえずりを聞きながら、あきはゆっくりと体を起こした。

（私、小鳥のさえずりが流れる目覚ましなんて持ってたかな？）

まだ半分ほど眠っている頭であきはぼやっと考えた。

（そうだ！）

あきは昨日のことを思い出したのか、部屋のカーテンを勢いよく

開けた。

「わっ！」

とても入りきらないくらいの日光があきの目の中に入り込んできた。

（そつだ。昨日からお父さんの仕事の都合で太陽が見える街に来たんだっけ）

あきは窓を開け、外を眺めた。外では通勤ラッシュの男性や女性が公園を行ったり来たりしていた。

（そついえば、私って学校はどうなるんだろう？）

あきは着替えを済ませると、リビングで朝食を作っている正史にそのことを尋ねた。

「学校？ああ、そのこともちゃんとラムルさんと相談してあるから安心だぞ。マンションの近くに緑王公園前と書かれたバス停があったらう。あそこから三つほど停留所を乗り継いだところにある学校なんだが……そつだ、どうせ暇なら行ってみるといい。ほら、バス

代だ」

正史はテーブルの上に置いてあった財布から小銭をいくらか取り出した。

「今日は土曜日で学校も午前中で終わるだろうからお昼を過ぎたら行ってごらん。制服の指定はない高校だから普段着のままで大丈夫だそつだよ」

「そつなんだ。私、一度でいいから制服って着てみたかったんだけどなあ」

「まあまあ、そつ言わずに行っておいで。一応明日は私も一緒に挨拶に行くが、先に下見くらいしたってかまわないだろう」

「うん、そつだね」

あきは頷きながら食卓の椅子に座った。

太陽がちょうどマンションの真上に昇った頃、早めに昼食を終えたあきは早速、学校に出かけることにした。

マンション前に停車したバスからは買い物がぞろぞろと降りてき

た。あきの乗り込んだバスはほんの数分で彼女の通う学校へと連れて行った。

「明城学園か…」

あきは小さく校門に掘られた学校名をつぶやいた。あきはゆっくりと校内に足を踏み入れる。正史の行ったとおり土曜日は午前中のみで授業が終わるためか学校に校内に残っている生徒はほとんど見なかった。

（広い学校だなあ。ここが私が明後日から通う新しい高校かあ）

あきはうれしさに呆けながら子供のよういきよるきよると首を動かしながら歩いた。あきの強い好奇心はいつしか彼女を建物の中へと引き入れていた。

（ここが一年のクラスかなあ。パソコンがいっぱい並んでる）

あきはガラス窓に密着して教室の中を覗こうとしたが、曇りガラスのせいの中はよく見えなかった。

あきは休むことなく学校探検を続けた。

（ここからは部活動の階なのかな？）

あきはどこからか聞こえる楽器の音色に耳を澄ませた。

（吹奏楽部か。前から入ってみたかったし見学くらいしていいのかな）

あきはそう思いながら楽器の音がするほうへと足を進めていく。だいぶ楽器の音色に近づいてきたところであきはふと目線を上にやった。教室の上のプレートには『パソコン部』と書いてあった。

（パソコン部って結構ヲタクな人が多いって噂の部活よね？幸い曇りガラスじゃないみたいだし、どんなヲタクな人がいるのかな？）

あきは電気のついていているパソコン部の教室の中をそっと覗き見た。（あれ？誰もいない。電気がついているから絶対に誰かいると思っただのになあ）

「こら、ここは立ち入り禁止だぞ！」

「うわあ！す、すみません……ってパソコン部がどうして立ち入り禁止なのよー！」

あきは思わず突っ込んだ。覗きをしていたくせになかなかの度胸である。

「あっ！」

あきは思わず言葉を失った。彼女の目の前にいたのは紛れもない、昨日出会ったあの少年だったからだ。

「やっぱり君だったね」

少年はにっこりと笑った。

「あなたは昨日の……」

「尼崎哲也だ。君は？」

「私は藤宮あき……です」

(この生徒だったんだ)

あきはまじまじと哲也の服を見た。決して美形ではないが若干地味な顔立ちの哲也には少々お門違いな感じがした。

「パソコン部に興味があるって感じじゃなさそうだけど何のために部屋を覗いていたんだい？」

「やっぱりばれてたの？」

「そりゃあ、大コピー室に行ってきた帰り道にふと見たら君がいたからね。何をしてるのかと思えば覗きをやってるものだから驚いたよ」

「ううう……」

あきは恥ずかしそうにうつむいた。

「それで、何をしてたんだい？おおよそ『パソコン部にいる人ってどんなヲタクがいるのかな』みたいなことを考えていたんだろ？」

「ううう……」

あきは考えていることを見事に当てられて俯いた。

「やっぱりね。まあ、あえて言うならこういうヲタクかな？」

哲也は自分の顔を指差した。パツと見ではそんなにヲタク顔には見えないが、よく見ればヲタク顔かもしれない。

「あ、あの私そういうつもりじゃ」

「わかってるわかってる。別に気にしちやいないからいいよ。実際

うちのパソコン部はそういう者の集まりだからね。ところで藤宮さんはここの生徒じゃないよね？僕、毎年一年生の名簿リストを先生たちに作らされているけど、今年の一年生の中に君の名前はなかったからさ」

「私は来週の月曜日からこの学校に転入するんです。今日はちょっと下見を兼ねて学校探検をしようかなと思ってきたんです」

「ふ〜ん、よければ僕が案内してあげようか？」

「え？でも、尼崎……先輩は部活があるんじゃないですか？」

「今日は部活じゃなくて私用できたんだ。でも、それももう終わっ
たしね」

「でも……」

「案内させてよ。どうせ帰っても受験勉強しかすることがないからさ。それに生徒じゃないと知らない憩いの場所や裏山庭園に地下通路まであるからね。きつと損はないと思うよ」

「じゃあ、お願いしていいですか？」

「オッケー。じゃあ、行こう」

哲也はにっこりと微笑んだ。

（それにしても裏山庭園だとか地下通路だとか、どんな学校なのよ
こじは）

あきは哲也の後ろを歩きながら半ば呆れていた。

「まずは本館から案内するね。ここは四階建ての校舎で学校の全学年の教室があるんだ。一階は職員室とか保健室とかが並んでる」

哲也はあきの考えなどまるで知ることもなく右手で各部屋を指しながら、教師たちの評判や噂をべらべらとあきに話した。

「詳しいんですね」

「生徒の噂とかは教室とかでも流れてくるからね。先生達の情報はさつきも言ったと思うけど僕は新一年生の名簿を作って職員室に届けるんだけどその時にね」

「なんかおもしろいですよね、先生の情報が入るのって」

「うん、僕もたまにそれを悪用するんだ」

「やっぱり」

二人で笑いながら廊下の突き当たりをたどり着いた。

「この階段を上れば一年生の教室が並んでいて、その上は二年生、一番上は僕たち三年生の教室が並んでいるんだ」

「へえ」

「藤宮さんがこれから入ることになる教室の中を見てみるかい？」

「はい。外からだけでも見ておきたいです」

「わかった。もしかしたらもう君の手続きは親父がもうしてくれているかもしれないし」

「え？」

哲也の一言にあきは怪訝そうに彼の顔を見た。

「いや、何でもない。それより来週から転入なら先生達の間で君の情報が入っているかもしれない。来週から通うのならもうクラスも決まっているだろう。ちよいと情報を仕入れていこう。ちよっと待たせてくれないか？」

「はあ……」

あきは何のことだかいまひとつわからないまま職員室に入っていて哲也を見送った。

数分後、哲也は教室の鍵らしきものを持って職員室から出てきた。「君の名前を出したらすぐに教えてくれた。君の配属教室はB組だつてさ」

「尼崎先輩、先生に聞いてきてくれたんですか？」

「そうだよ。せっかくだからこれから自分の勉強する教室を見たほうがよかるうかと思つてさ。まあ教室はどれをとつても一緒だけど」

「そんなことないです！ありがとうございます、尼崎先輩！」

あきの予想以上の喜びに哲也は思わず顔を朱に染めた。二人は階段を上がり、一年生の教室にやつてきた。

プシュ。カードキーを刺すと、扉が素早く横にスライドした。

（これが、私がこれから仲間たちと学ぶ教室なのね）

あきはホール上の教室をゆっくりと歩きながら珍しげにパソコン

のキーボードを触ったりしていた。

「この学校の授業は全部そのパソコンを使って行われるんだ。四世紀前では大学からやっとこのシステムだったらいいけどね」

哲也はあきに向かって言うわけでもなくつぶやいた。

「私の住んでいたところはこんな感じじゃなかった」

「シエルターでの生活の様子はこの街の人たちもよく知っている。

かなり荒んだ生活らしいね。でも、この街にも少しだけ荒んだ奴はいるし……そんなに違うものなのかな、太陽があるこの街と？」

「うん。学校だってこんな立派な造りじゃなかったし、先生達の中には自暴自棄になっている人もいてまともな授業なんてなかったもの」

悲しげにつぶやくあきに、哲也はかけていい言葉を見つけ出すことができず、そのまま立ち尽くしていた。言えたのは立った一言。

「そろそろ案内を再開しようか」

あきはその言葉に小さく頷いた。

案内を再開すると、あきは元通りの明るさを取り戻して楽しそうに校舎を見ていた。

「それじゃあ、あの時はただの八つ当たりだったんですか！」

あきは怒鳴るように言った。

「だからごめんって最初に謝ったでしょ。僕は来年、というかあと半年もしたら大学受験なんだよ。なのに志望校すら決まってるってなくてあの日も学校のネットからネット審査を受けたんだけど見事に落ちちゃってね」

「それで八つ当たりですか」

「まあね。君に愚痴を言ってもしょうがないのはわかっているけど、実力はあると思うんだよ。学年模試でもトップ十位に入ってるし。でも、受ける大学がシエルターの街の中の大学だからな。出身地の時点で落とされてしまうんだ。やっぱり、よく思うはずはないよな。この街だけ市長のおかげでシエルターを作らなくてもよくなった。そのせいでほかのシエルター入りした街の科学者達から非難を受け

た

「気のせいかな若干哲也の声が大きくなっているように聞こえた。

「悔しいのなら藤宮博士みたいに行動に移せよ！うちの市長は人がいいから絶対に教えてくれるはずだ！なのに藤宮博士以外の科学者達は技術を盗みに来ることすらしやしない。何でだと思っ？」

「わからない…です」

「見栄さ。市長にこの街の技術の教えを請うことは市長が世界で一番の科学者ということになるだろう」

「あ……」

「それが嫌で誰もこの街に足を踏み入れない。でも、藤宮博士は違った。自分の名声なんて考えないで人々のために働いて。あの人がそ本当の科学者であり人間だよ」

哲也の言葉にあきは返す言葉もなくその場に立ち尽くした。

「ごめん、また君にあたりちらすように言ってしまった。でも、数いる科学者の中で憧れなのだ、藤宮博士は」

日が暮れ、二人は学校の校門で別れた。

「今日は案内してくれてありがとうございました」

「いやいや。こっちこそ無理矢理誘ってごめんよ」

「じゃあ、私はバスだから…」

「あ、ちよっと！」

去ろうとするあきを哲也は慌てて引き止めた。

「名前聞いた時からずっと気になっていたんだけど、君は藤宮博士の」

「ええ、そうですよ」

「やっぱりそうなんだ。じゃあ、近いうちに君の家に行ってもいいかな？」

「はい？」

あきは一瞬哲也の言葉が理解できなかった。彼女の心情を読んだのか、哲也は慌てて弁解する。

「変な意味じゃなくて、博士に会ってみたいだけさ。やっぱり、そ

の、ファンとしてさ」

哲也の顔が少し赤くなるのがわかった。あきは微笑すると、「聞いておきますよ」と言っ、今度こそバス停に向かって歩き出した。(驚いたなあ、お父さんのファンがいたなんて。シエルターの中でそんな話聞いたことなかったし)

そんなことを考えるあきの口元はいつの間にか緩んでいた。

(やっぱり身内のファンがいるってのは嬉しいな。お父さん、どんな反応するかなあ)

あきの口からは思わず笑いが漏れた。

STAGE 2

STAGE 2（ホームパーティー）

「ホームパーティー？」

あきはまだ湯気を立てている味噌汁の入った汁椀を丁寧に置きながら聞き返した。汁椀からは味噌の匂いと朝日のように暖かい湯気が立ち込めている。

「この街にもだいが慣れてきたし、何よりラムルさんが我々に引越し祝いをしたいと仰るんで、どこか食べにいこうというのだが、せっかく私達の引越しパーティーなのだから自分達の家でやろうと思っつね」

「でも、それだと買い物にいかなくちゃいけないよ？私は学校だし、お父さんも研究があるんじゃないの？」

「なあに、今日は研究を早めに切り上げて買い物は私がしておくよ。それならいいだろう？」

正史の口調から察するに、彼はどうしてもパーティーを開きたいようだった。そんな父の思いに駄目だしをすることなんか、あきにはできなかった。

「よし、それじゃあ今日はあきもお友達をいっぱい連れてきなさい」

「うーん、急にそんなこと言われて皆来るかなあ」

「まあ、無理に連れてくる必要はないよ。」

我々だけでこぢんまりとやるのも悪くはないが、どうせなら大勢で楽しくやりたいからね」

「わかった。とりあえず誘ってみるね」

あきはそう言って、小さく微笑んだ。

同じクラスの友人に相談すると、友人は快くパーティーの参加を希望した。皆、予定があるのではないかと考えていたが、そんな話は微塵も出なかった。

学校にいる間中、あきは誘える友人達を誘えるだけ誘った。中にはやはり予定が入っていたりした者もいたが、終業時間までには十分な人数が集まっていた。

（でも、よくよく考えたらうちはそんなに広くないし、みんな入りきれるかなあ）

あきはそのことを若干気にしていたが、父の言葉を思い出すと、それもいいかと思えるのだ。

（そうだ。あと一人、絶対に参加して欲しい人がいた）

下駄箱まで来ていたあきは靴を履き替えるのを止め、部活動棟に向かった。

向かった場所は部活動棟の二階にあるパソコン室、パソコン部の部室だ。今日は活動が休みじゃなかったらしく、中にはあきの予想していたようなヲタク達がパソコンの並ぶ机に一列になって座って、キーボードに触っていた。

さて、この中からどうやって哲也を見つけようか。あきの一番の問題点はそこだった。人に聞けば変な意味合いをもたれてしまう可能性がある。それだけはあきとしては避けたいところだった。

「藤宮さん？」

策を練っている最中のあきの肩にポンっと手が置かれた。びっくりして振り返ると、そこにいたのは、噂の本人その人であった。

「やっぱり藤宮さんだ。どうしたんだい、こんなところにきて？」

「あ、尼崎先輩」

本人から声をかけてもらってあきは安堵したが、少し情けない気分ではあった。そんな表情が顔に出ていたのだろうか、哲也は「どうかしたの？」と心配そうに声をかけた。あきは「なんでもないです」と苦笑した。

「ここで立ち話はなんだから、廊下で話そうか」

哲也は他の部員達に断りを入れ、あきを廊下に連れ出した。

「ありがとうございます」

「部長だったんですね」あきは意外と言わんばかりの顔を哲也に向

けた。

「まあね。この部屋で話していたら他の男共が気になっちゃおうがないだろ？なんか言いづらそうな顔していたし。それで、用件は何？」

「あ、はい」

あきは朝の話を哲也に伝えた。

「僕も来ていいの？」

「はい。是非どうぞ」

「ほんとにいいの？」

哲也が確認するように問い返すと、あきは優しく微笑みながら頷いた。

「先輩、前に家族のことを話してくれましたよね」

あきはそう言いながら、先日哲也から聞いた家族の話を思い出した。

それは、あきがラムルには家族がいるのかと哲也に質問したことが始まりだった。

「家族？確か、子供が一人いた気がするよ」

「へえ、会ってみたいな」

あきの願望に哲也は「近いうちに会えるんじゃない。案外もう会っているかもよ？」と曖昧な返事をした。もちろん、そんな哲也の態度にあきは怪訝な顔をしていた。

「尼崎先輩はラムルさん、この街の市長さんについてどう思いますか？」

「市長を？」

哲也は空を見上げながら考えた。それはどちらかと言えば、考えているというよりかは思い出しているといった表現のほうが近いかもしれない。

「あの人は優しい人……かな。困っている人を放っておけない人で、それがどんなにみずばらしくても、どんなにみつともなくても必ず助けるんだ」

哲也は言い終わった後に「僕も、その助けられた者の一人なんだ」と懐かしいそうにつぶやいた。

「尼崎先輩が？」

意外な一言だった。それだけにあきはその一言しか口に出せなかった。と、同時にさっきの子供がいるという話は彼のことだとわかった。

（だからあんなふうにしたのね）

哲也はそんなあきの心情に目をやりながら、自分の全てを話した。

「僕の本当の両親はいないんだ。と言っても死んでいるのかはわからない。シエルターができて、太陽の恐怖から逃れられたから、もしかしたら生きているかもしれない。今から十二、三年ほど前に、僕は市長に拾われて育ったから。だから、今はあの人が僕の父親代わりかな」

「そうだったんですか」

あきは申し訳なさそうに謝った。

「別にいいんだよ。僕が話したくて話したんだから」

哲也は気にした様子もなく、穏やかに笑った。

「あのときの話覚えてくれたのかい？」

「はい。だから、余計に先輩には来て欲しくて」

「ありがとう。是非、行かせてもらおうよ。それで、いつやるんだい？」

「今夜です」

あきの一言に、哲也は急に申し訳なさそうな顔になった。

「実は、今夜は予定がもう入っているんだ」

哲也は本当に残念そうに言った。

「市長が今夜出席するパーティに僕もついていかされるんだよ。そのメールがついさつき届いたんだ」

「そうなんですか？残念です」

あきはしょんぼりうなだれた。

「ごめん、せつかく誘ってくれたのに」

「いいんですよ。今日のパーティ、楽しんできてくださいね」
「ありがとう。藤宮さんも楽しんできてね。そうだ、今度は僕が君をパーティに誘うよ」

哲也なりの思いやりなのだろう。しかし、あきは首を横に振った。
「だめですよ先輩。先輩は受験生なんだからしつかり勉強しないとね」

あきの激励に哲也は心底嫌そうな顔をしていた。哲也は見た目こそ真面目そうなのだが、実は意外にも勉強が嫌いなのだ。

「先輩、ちよつといいですか？」

部屋のドアが開き、中からパソコン部員が出てきた。

「ああ、すぐ行くからちよつと待っていてくれ。それじゃ藤宮さん、また機会があつたら会おう。なんなら、パソコン部こゝにきてくれてもかまわないよ。いつそのこと入部しちゃったりしてね」

「アハハ、それはちよつと……」

あきは苦笑しながら部屋を去っていった。

学校から帰る途中のバスの中、あきは電子メモ帳に今日のホームパーティに参加する人数を数えていた。

（結構誘ったけど、結局来てくれるのは五人か。まあ、そのくらいがちよつどいいか。お父さんもきつと、ラムルさんの会社の人を誘ったりするだろうし）

あきは電子メモのメモリから古いものをディスプレイに表示した（大人がくるんだから、少しはお酒のおつまみも作つとかないといけないよね。お母さんが残してくれた料理メモの中に、それっぽいのがあるといいけど）

あきは料理の腕はかなり良い。もともと、料理に縁があつたわけではなかったが、母親が病気で亡くなつて以来、家事をする人間が

いなくなってしまうたため、あきは母親の部屋から見つけた料理メモを頻繁に活用しながら料理の腕をあげていったのである。

（お父さん、私達用にちゃんと軽いお酒やワインも買ってきてくれるといいけど）

あきはバスの窓からちらりと見える夕陽を眺めながら、そんなことを考えた。

家の鍵は閉まっていたので、どうやらまだ正史は買い物中であることがわかった。あきは父親にワインを忘れないようにメールをするか悩んだが、父を信頼し、自分は今日のパーティーの料理に取り掛かることにした。

（おつまみ系は必須でしょ、それから友達用におしゃれな料理も入れて……と）

あきは作る料理の品を頭の中で決めながら、てきぱきと野菜や肉の下準備に入る。今日は何を作ろうかと思うと、ついわくわくしてしまうものだ。あきはいつのまにか鼻歌を歌っていた。

パシユ。家のドアが開く音がした。正史が帰ってきたのだ、と思いながらもあきの料理をする手は休まらない。

「ただいま」

「どうしたの、ご機嫌だね？」

「そうか？人を呼んでパーティをするなど久しぶりだからな。心が躍るんだよ。日本酒もいいものがいっぱいあったしね」

正史はこの時代では稀にも見ない日本酒派だった。いや、普通の酒を好むという時点でかなり珍しかった。二十世紀末から二十一世紀中ごろまでは流行っていた日本酒だが、今ではほとんどの人間が機械の作った、ただ酔うためのジャンクアルコールを好むからだ。

「ワインはあった？」

あきが聞くと、正史は微笑を絶やさぬまま「もちろんあるぞ」と、袋からそこそこ値段の張りそうなワインを取り出した。

「お父さん、そんな高そうなワインじゃなくてよかったのに。そこから辺に売っている果実酒でよかったですよ」

「いいじゃないか。今日は楽しい夜をすごすのだから、このくらいはいかないと」

「お父さん、完璧に私が未成年だって忘れてるでしょ」

「大丈夫だよ。今日は市長さんがくるんだから、多少のことは多めに見てくれるさ」

正史の上機嫌は今日いっぱい続きそうだが、あきは父のあまりの浮き足立ちように少し呆れながらも、料理だけはしっかり作っていた。

（あれ？今日ラムルさんは他のパーティに行くって言ってなかったわけ？）

あきは学校で聞いた話を正史にしたが、正史は「うん、朝にラムルさんのところへ行って本人と会ったけどそんなことは言ってなかったぞ？」と、首を捻るだけだった。

「役所の人達は大体参加するから来るとは思うのだが……ところで、今日も美味しそうなものを作っているんだな」

「あ、うん。今日はお客さんがいっぱい来るし、お酒のおつまみも用意しないといけないと思ったから奮発したよ」

「お前もこんなに豪華なものを作れるようになったんだな」

「アハハ、昔はつぶれた目玉焼きを作るのがやっとだったのが嘘みたいだよな。私もびっくりだよ。これも全部、お母さんのおかげだね」

「お母さん、か」

正史は何もない天井をふつと見上げた。

「千春の料理は天下一品だった。彼女もきつと天国で満足してくれているに違いない。自分の子供が、自分のレシピをこんなに立派に再現してくれているのだからな」

正史の目につつすらと何かが光った。

「もうすぐお母さんの命日だね」

天井に向かって昇る湯気をあきは目で追いながらつぶやいた。

「もう、か。早いなあ」

同じように湯気を目で追いながら正史がしみじみとつぶやいた。

あきの母、千春はこの暗黒の時代を吹き飛ばすような明るくて気さくな女性だった。そういえば、彼女もまた早くに両親を亡くして、家事を切り盛りするようになったのだとか。

(親子の血は争えないということか)

正史の心の中には今でも、病気になる前の明るい彼女がいた。千春は、シエルターでの生活に慣れることができず、最初にシエルター内で大流行した病気にかかり、その短い生涯を終えた。

(千春、君にも見せてあげたいよ。私の夢でもあった、この風景を)

「まだ、駄目」

「え？」

正史は閉じていた目をはっと開いた。確かに今、何かか聞こえた。

「これは貴方の望んだ風景じゃない」

やはり聞こえた。そして、この声は……

「この風景は仮初の姿。早くまやかしを破って。取り返しがつかなくなる」

「待て！ どういうことだ！」

「急いで……」

声はその一言を最後に再び立ち込める湯気の中に消えていった。

「どうしたの、お父さん？」

あきは怪訝そうに父親の顔を覗き込んだ。正史の額にはいつの間にかじつとりと脂汗がにじんでいた。

(今のは彼女なのか？ この風景が仮初とは一体どうということなんだ？)

正史の耳には、もはや娘の声など全く入ってこなかった。

STAGE 3

STAGE 3 予兆

ピンポーン。家のチャイムが鳴って、次々と人の波が押し寄せた。

まず入ってきたのはラムル一行。それぞれの手には酒瓶や、すぐそのスーパーで買ってきたつまみの入った袋を持つ者の二通りに分かれていた。

「やあ、お言葉に甘えてのことやって参りました」

「ようこそラムルさん。あれ、そちらの方は？」

正史の目にとまったのはラムルの横にいる真面目そうな少年。

「ああ、これは私の息子です。と言っても本当の息子ではないのですがね。哲也、こちらが少し前から話していた藤宮博士だ」

（お、お邪魔します初めまして藤宮博士、お会いできて光栄です
実物に会えて緊張しているのだろうか、哲也は少しばかり早口だった。）

「哲也は博士の大ファンでしてね。今日のパーティをとてもしみにしておったのですよ」

「それは光栄です。哲也君、いつもお父さんにはお世話になっていきます」

「い、いえ。恐縮です」

哲也はスツカリ縮こまった話し方しかできなくなっていた。

「さあ、役場の皆さんもどうぞリビングのほうへ。今夜は目一杯楽しみましょう」

ピンポーン。正史がラムル達をリビングに案内しようと、ちょうど振り返ったときにタイミングよくチャイムが鳴った。

「きつと私の友達だ。お父さん達は先にリビングに行ってる」

「わかった」

正史は小さく頷くと、ラムル達をリビングへと招き入れた。

ドアを開くと、あきのクラスメート達がそろそろと押し寄せてきた。あきは軽く挨拶をしながら、彼女達をリビングに案内した。

「本日はようこそ我が家にお越しいただきました。たいしたものもございませんが皆さんの日ごろのお疲れを癒す場にしていただければ幸いです。では、乾杯」

「……かんぱーい!」「」

総勢十八人による乾杯の合唱。たった、その一言だけなのになぜか笑いが収まらなかった。

正史はラムル達と、あきはクラスメート達と共に時間を忘れ歓談にいそしんだ。そして、この年代の少女たちが集まるとどうしても起こる会話が、彼女たちの間でも例外なく行われた。

「ねえねえ、あきはさ、うちのクラスでいいなあって思う男子はいるの?」

「えー何それ?」

あきはわざととぼけて見せるが、友人の一人に羽交い絞めにされて言え言えコールを受けてしまう。

「うーん、特に私がいいと思う人はいないかな。そういう佳奈ちゃんはあるの?」

「え?ちよつと、何であたしに振るのよ?」

「佳奈に質問しちゃ駄目だよ。この子にはもう、ちゃんとした男性ひとがいるんだもの」

「ねえ」

佳奈と呼ばれた少女はあき以外の女子全員の冷やかしの視線をいつせいに浴びた。

「も、もういいじゃない。その話は。他の話題にしよ」

佳奈は話をはぐらかそうとするが、そこまで聞いてみすみす聞き逃すのはあきの性格が許さなかった。今度はあきが佳奈を羽交い絞めにする番だった。

「佳奈はねえ、三年生の先輩に彼氏がいるんだよね」

「そうなの!？」

あきの真剣な眼差しに佳奈は観念したのか小さく頷いた。一瞬、あきの脳裏を不安という二文字がよぎった。

「サツカー部の先輩よ。私がマネージャーで」

「へえ」

あきは笑うことで何とか平静を保っているように見せた。内心は、それはもう安心感でいっぱいだった。

「やっぱり高校生になったんだから彼氏くらいは作っておきたいよねえ」

友人の一人がぼそりつぶやいた。

「そういえば、男の人の中で一人私たちと同じくらいの人を見たよ」

「ああ、あそこで博士達と話してる人でしょ。あの人、市長の息子なんだって」

「悪くはないんじゃない？」

「悪くはないけど、あれはけっこうヲタクって感じじゃない？」

「ああ、そう見えなくはないかも」

ああ、女性はどうしてこういう話に目がないのだろう。この少女たちを見ていると自分が女性だという意識が少し薄らいだ感じがした。

(シエルター内の学校では皆あまりこういう話には無関心だったかなあ。日々、生きることと精一杯というか。これが普通の会話なのかもしれないな)

あきは複雑な心境のまま、その後もずっと友人達の色恋話に付き合った。

夜はあつという間に更けていき、招かれた者達は自分の帰るべき場所へと帰っていった。

「親父！お・や・じ〜！困ったなあ、ぜんぜん起きやしない」
哲也は深いため息をついた。

よつぽど楽しかったのだろう。ラムルの顔は眠っているというのに
眩いほどに嬉しそうだった。

「夢の中で、まだパーティーを続けているのかな？」

正史はそう言って微笑した。

「起きるまで待っていてあげなさい。なに、私たちのことなら気に
しなくていいから」

正史は優しく微笑みながら「何か上にかけるものを探してこよう
と言ってリビングを去っていった。

（まったたく……）

哲也はソファで気持ちよさそうに眠るラムルを見下ろした。

「楽しかった？親父……」

気のせいだろうか、哲也の問いにラムルが寝ぼけながら頷いた。

「よつぽど楽しかったんですね。今、先輩の問いかけに頷いていま
したよ？」

哲也の後ろではいつからいたのか、あきがおかしそうに笑いなが
ら立っていた。

「聞いてたの、今の？」

哲也は恥ずかしそうに言うと、あきはにんまりと笑って頷いた。

「意外とお父さん思いなんです。先輩くらいの年の人は、親に対
してもっと冷たいものだと思ってました」

「確かに冷たい奴のほうが多いな。けど、この人は本当の父親でな
いにすれ、僕の大切な人なんだ。氣遣うのは当然だよ」

哲也とあきはしばらくそのままラムルの寝顔を見ていた。

「先輩の言っていたパーティーがうちのパーティーだなんてちょっとび
つくりしました」

あきが不意につぶやいた。

「僕もびつくりしたよ。どうせいつもみたくホテルを貸しきって、
役場の皆とパーティーなのかなと思っていつたら近くのマンシ

「ヨンだったからさ」

哲也は「君に会えて嬉しかったよ」と、自分で言いながら俯いた。暗がりではわからなかったが、おそらく照れているのだろう。

「そういえば今日の料理はすごく美味しかったけど、どこの店で注文したんだい？あんなにうまい料理を作る店なんてあったかな？」

「あれは全部私が作ったんですよ？」

「ええ、そうなのかい？」

「信じられないですか？」

あきは得意そうに上目遣いで哲也の顔を見つめた。

「素直に驚いた。君はどちらかというと家庭科系よりは運動系のほうが得意そうに見えたものだから」

「クラスの皆からも言われました。でも、なんてことはないんですよ。私の家では家事をする人はいませんから」

「え？」

哲也が怪訝な顔をするのを横目に見ながらあきは続けた。

「私のお母さんは、病気でもういないんです」

「！！」

「お父さんは研究の毎日だから家事をすることはできない。必然的に家事は私の仕事になったんです」

「そうだったんだ。お母さんが……」

「でも、私は自分が家事をやらされていると思ったことは一度もないですよ」

「一度も？」

自分ではありえない話だ、哲也は目の前の少女に尊敬の念を抱いた。

「掃除や洗濯は終わった後の達成感がたまらないです。料理はいろんなものを覚えて、それが美味しくできたときには感動ものですよん！」

「へえ、すごいんだね」

男の哲也にはどうもいまひとつわからない思考だった。あきは「

そんなものですよ」と明るく笑った。

ラムルの耳元で話をしていたためか、熟睡していたラムルは案外早く目を覚ました。

ソファから起き上がり立とうとするが、まだ酒が残っているせいかふらふらと壁にもたれかかってしまう。

「お、親父？無理するなよ？」

「なあ〜に言うか。あたしゃ、正気だぞお？」

「いや、自分に問いかけてどうするんだよ」

呆れる哲也の横であきも苦笑していた。

「おや、起きたんですか」

厚めの毛布を両手に抱えながら、正史は「もう少し休んでいければどうですか？」と優しく微笑んだ。

「いえ、せっかく起きたようですので僕達もそろそろお暇します。

博士、今日は親父共々お招きくださってありがとうございます。

至らぬ父ですが、どうぞこれからもよろしく願います」

「わかりました。哲也君もどうかこれを機会に娘と仲良くしてやってください」

「はい」

哲也ははつきりと返事をして、大きく頷いた。

尼崎一家も帰っていき、あきと正史は協力して後片付けに入っていた。

「あ……」

あきが持っていた皿は気づいたときにはもう床とぶつかっていた。

「あき！」

正史は慌てて愛娘の側に駆け寄った。

「大丈夫か？」

正史の問いにあきは力なく頷いた。

「ちよつとお酒を飲みすぎちゃったかもしれないね」

あきは微笑するが、その笑顔はどこか弱々しかった。正史はそれを察し、あきにもう寝るようにと促した。

「何、後片付けなんて明日でもできるさ。今日はお前もいっぱいしゃいで疲れたんだろう。ゆっくり休みなさい」

正史の優しい一言にあきはやはり弱々しく頷くだけだった。

(シエルター内で風邪すらひいたことのなかった子が急にあの弱り様とは。何か嫌な予感がする)

リビングに一人残された正史は割れた皿の処理をしながら、そんなことを考えた。

STAGE 4

STAGE 4（正体）

ホームパーティーから一週間が経過した。あきの病状は日に日に悪くなり、ホームパーティーからちょうど一週間経った今日、彼女は入院という形になった。病院なら少なくとも自分の作る食事より栄養があるものが食べられて、すぐに病状もよくなるだろうと、正史が判断したからだ。しかし、あきの病状は病院の薬でも効果がなく、病状は悪化の一途をたどっていた。

一方、あきが入院した日の翌日から哲也は毎日のように病院に赴き、あきの見舞いにやってきた。クラスメート達もちよくちよくやってきた。あきは最初のうちは明るく返事を返していたあきだったが、病状が悪化するに連れ、彼女の返事には元気を感ぜなくなっていた。

そして、あきが入院生活を始めてからついに一ヶ月が経った。

哲也は学校を終え、いつものように病院へと向かうバスに乗っていた。今日の見舞い品はいろんな種類のハーブが入ったハーブティード。今では決して取れることのないハーブだが昔は様々な料理の香り付けに使われていたらしい。元々香りが強いいため気付け薬としても十分な効果を発揮したそうだ。これなら今の彼女の体は受け入れてくれるという自信があった。

「こんにちは」

哲也は病室に入ると、最初に正史に挨拶をする。

「やあ哲也君、今日もきてくれたんだね。あきが変わって礼を言うよ。ありがとう」

「そ、そんな。博士、頭を上げてください」

正史に深々と頭を下げられ、哲也は慌てふためいた。気を取り直して、彼はかばんから日本中で、いや世界中でお目にかかれるかど

うかわからないハーブティーの入った水筒を取り出した。

「今日はハーブティーを持ってきたんです。昔は気付け薬として使われていたくらいですから、きつとあきさんにも効果があると思つて」

自信たっぷりで水筒のコップにお茶を注ぐ哲也に対して、正史の反応は冷たかった。

「哲也君、君の厚意は本当にありがたいものばかりだ。だが、あきはもう、物を食べることができなくなってしまったようなのだ」

正史の言葉に哲也は頷くことも、言葉を返すこともできなかった。

「じゃあ、彼女が死んでしまうのは時間の問題……？」

「いや、一応点滴は打っているからそれはない。だが、このままではいずれは……」

病室内に重い沈黙が訪れた。

「パーティーの翌日から病状が発覚したんですよね？」

「ああ。君ももう感じていると思うが、この病状は風邪ではない。おそらく外界のウイルスに感染したと考えられる」

「外界のですか？」

「うむ。我々は数ヶ月前まではシエルターの中で生活をしていた。シエルター内は常にあらゆるウイルスに対するバリアのようなものが張られていた。それが仇になってしまったのだ」

「そうか。いかなる病原菌も通さないということは、その分全てのウイルスに対する手効力が落ちてしまっているんだ」

「その通り。病院の精密検査の結果が出てないのでまだなんとも言えないが、ウイルスはきつと見つかる」

「ええ、そうですとも！」

哲也は大きく頷いた。

（そうさ、この時代の医療ならきつと見つかる。きつと、だ）

そう信じるしかなかった。なぜなら、今の哲也にできることはそれくらいしかなかったから。

数日後、正史はあきの主治医に呼び出された。検査の結果が出たのだろう。正史は早く、あきの中に巣食う者の正体を知りたかったが……

「今、何と言った？」

正史の体はわなわなと震えていた。

「そうだ、こんなことがあってはならないのだ。」

「あきの中に、娘の体内にウイルスが見つからなかったけど？そんなばかげた話があるものか。私が今、冗談を聞ける状態でないことくらいわかっているだろう！真実を話せ！娘の中にいるウイルスは何だ！」

興奮する正史に対して、主治医は冷静だった。小さく首を横に振り、数分前と同じように言った。

「あきさんの体にウイルスらしきものは見当たりません。あの子の病状は精神的なストレスによるものと判断してよいでしょう」

もし正史に理性というものがなかったなら、今頃彼はこの主治医を絞め殺していただろう。

「ストレスだと？確かに病状はそれとそっくりなものが多い。だが、娘には何のストレスもないはずだ。あの子はいつも学校から帰って夕飯になって、私にいつも学校の出来事を話してくれていた。そんなあの娘の中にストレスの因子となるものは一つもない。あの子がストレスなどあり得ない！」

「では、彼女の病気の原因は何だというのです？」

主治医の冷淡な言葉が正史に突き刺さった。もちろん、正史はその問いに対して答えることはできず、ただ悔しそうに唇を噛み締めるしかなかった。

「いったい何が、いったい何があの子を苦しめているというのだ！」
窮地に陥った正史は誰に向かって叫んだわけでもなかった。目の前にいる医者は腹立たしいが、全て事実を言ったのだ。

「あの子の病状は絶対にストレスではない。絶対にそれを突き止めてやる！」

正史があきの病室に戻ると、いつものように哲也がいた。彼は、あきに今日起こった出来事でも話しているのだろうか。

「哲也君、ちよつといいか？」

いつにない正史の表情に、哲也は怖気立った。

正史はあきの検査結果も含めて、全てを哲也に話した。

「そういうわけで私はしばらく元の研究施設に帰る。そこで、あきの病気の正体をつかみ、彼女用の抗体を作る作業に入る。君にお願いしたいのはここからだ。私は今言った理由でしばらくあきのそばについてやることができないから、君に看病をお願いしたい。あきは君に懐いているし、私よりも君のほうが安心すると思うのだ」

「は、博士」

ほとんど勢いに任せて喋っている正史に、哲也はなんとか自分の提案を切り出すことができた。

「僕も行ってもいいですか？僕もあの子の病気を治したい」

哲也は自分の心のうちに秘める彼女への思いも含めて、全力で言ったつもりだった。しかし、今の正史には到底届くはずもなかった。「哲也君、まだ子供の君に人を治すという任は重すぎる。これは私の問題なのだ。君は私の願いだけをかなえてくれていればそれでいい」

正史がその後、哲也を振り返ることはなかった。

STAGE 5

STAGE 5（真実）

正史がシエルターに戻ってから一ヶ月が経過した。

哲也は正史の言いつけどおり、あきの看病をしていた。この頃、あきの病状は若干だが回復したように思える。その証拠に、彼女は病院の食事を少しずつだが食べ始めるようになったのだ。

「すごいね、あきちゃん。今日は半分も食べられたじゃないか！」
哲也はまるで、自分の家族が食べてように喜んだ。

「私もびっくりだよ。ほんの数日前までは飲み物すら受け付けなかったのに」

あきはにつこりと微笑んだ。

「食べられるようになったなら回復まであと少しだよ。がんばって」

「うん！」

あきは本当にうれしそうだった。

（そりゃそうだろう。今まで苦しんできたんだからな。これを機に回復していくといいな）

そう思う哲也の心の中では、少し腑に落ちないことが起こっていた。というのも、以前、かなり前に自分自身もこんな姿を誰かに見せた覚えがあった。

（だんだん病状が悪化して行って、しばらく経つと何もしてないのに自然に治る病気。僕もかかったことがあったような……）

パシユ。

病室の扉が開き、外からは久しぶりに見る顔がこちらに向かって歩いてきた。しかし、どうも様子がおかしい。あきの病気に対する手立てができたのならもつと嬉しそうにしているべきだ。なのに、

この男の表情は嬉しさとは逆に、怒りに満ちていた。

「哲也君、ちょっときてくれ！」

正史は哲也がうんと頷くと前に、その手を取り、強引に病室から出て行った。

「博士、いったいどうしたんです？ 久しぶりにあきさんに会ったのだから一声くらいかけてあげても……」

「そんな時間はない！ 役場へ急ぐぞ」

正史は哲也の言葉を強引に遮るとせかせかと廊下を早足で歩いた。「おっとそうだ」正史は思い出したように白衣のポケットから薬のようなものを取り出した。

「これは君に預けておく。今日中に飲むんだ」

「僕が飲むんですか？ あきさんではなく？」

「そうだ。急いで飲まないと手遅れになるかもしれない。私はもう二度と、君達のような若者を奴に奪わせたくないんだ」

正史はそう言うと、また廊下を急ぎ足で歩いていった。

（博士の言っていることの意図が読めない。いったいどうしてしまっただんだ？）

哲也はとりあえず正史についていくことにした。行く場所が役場というのも気になるところだった。

役場につくなり、正史はラムルを呼び出した。

「久しぶりですね、貴方がここを訪れるのは。あきさんの病状はいかがです？ 何か薬を開発されたのでしょうか？」

いつものように人当たりよく言うラムルに正史は「違う」と一言つぶやいた。

「私が開発したのは哲也君のための薬。そう、貴方の手から哲也君を解放するためにね！」

正史の言葉に一番動揺したのは哲也だった。なぜ、自分が薬に頼らなければいけないのか？ どうして彼は実の娘を救おうとしなかったのか？

動揺する哲也の横でラムルは嘲笑した。

「これはおかしい話だ。哲也を私の手から解放すると仰るとはまたきつくない話だ。あきさんのことはもう、どうでもよいということですか？」

「あきの病気は間もなく回復する。その後に、あの子にも哲也君に渡した薬を飲ませるつもりだ」

「ほう。なかなか興味をそそる話のようですね。少しお聞かせ願いますかな？」

ラムルは正史をどこか探る目で睨んだ。

正史はそれに臆せず、硬い表情のまま頷いた。

「全て話してやるよ。あきの病状についても、この街がどうしてシエルターなしで過ごせていたのかもな！」

哲也は訳がわからなかった。この二人はいったい何を言っているのか、そして、今までで見たことのない自分の父親の表情は、まるで獲物を狙う動物のように鋭かった。

「私は研究所に戻って、秋の病気の原因を調べているうちにとんでもないことを発見した。それがこの街のからくりだ」

正史は白衣のポケットから、あの日ラムルが渡した薬の入った小瓶を取り出した。

「単刀直入に言おう。この薬は麻薬だ」

「え？」

哲也は正史の言葉に耳を疑った。今まで自分を、この町の人間を救ってきた薬が麻薬だったとは信じられなかった。哲也のそんな心情をよそに正史は説明を続けた。

「この薬に紫外線を防ぐ効果などない。それどころか、この薬は人間に紫外線を防ぐ効果があるということを植えつける薬、つまり麻薬なのだ！」

「……その根拠は？」

ラムルはあくまで冷静に正史の説明を聞く。

「この街はもともとならず者達の住み場だ。しかも、その当時、ここは汚染の広がっていた危険地域でもあった。なのに、不良達は逃

げもせず住んでいた。なぜか？それは、この薬と同じような麻薬があつたからだ。これは私の推測だが、街の近くに麻薬の取れる場所でもあるのだろう。いつものように、麻薬を取りに行くと、そこで見たことのない麻薬を見つけた。試してみると、太陽の元にもなんともなくなつた。そこでお前達は考えたのだろう。この麻薬を一般化させよう」と

正史がそこまで言うと、今まで正史の説明を黙って聞いていたらムルが急に不敵な笑みを浮かべた。

「やれやれ、流石は日本が誇る天才科学者だ。わずか一ヶ月でそこまで調べ上げ、さらに具体的なことまで推測するとはな」

「お、親父……？」

哲也はどうしてよいかわからなかつた。絶対に否定されるべきことだと思つていたのに、目の前にいる自分の父親は、このほんくら科学者の言つたことを素直に認めてしまったのだ。

「お前にもいつかは話さなければと思つていたが……今がその時だ。私がこの街の市長として就任したことも含めて、全てを話してやる」
う

もつ三十年以上も昔の話だ。私は旧口サンゼルスでは札付きの悪人^ルだつた。あるとき、私の管轄していたグループがへまをして、全員に国流しの刑を言い渡されたのだ。そしてやってきたのが日本だつた。当時、第五次世界大戦の影響で汚染もひどかつたから、私たちのような者を追放するには十分な場所だつた。

ここで生活するのはしんどかつたよ。いや、しんどかつたなんてものじゃない。いつ死んでもおかしくなかつた。その時だつて紫外線による病気は流行つていたから、それで死ぬ者も少なくなかつた。十六年前、日本の科学者達が隋を集めて作り上げた紫外線遮断ドーム、シエルターが作り出された。悪人だけの東京跡にもそれは作

られた。私がこんな奴らのために作る義務があるのかと聞くと、日本人の科学者はどんな者にも人権はあると答えた。全く、日本という国は何百年経ってもお人好しの集団ばかりだと思った。しかし、私達も若くして死にたくはなかったから行為だけは素直に受けさせてもらったがな。しかし、やはり今まで外の空気に触れていたものだから、なまじ暗い空間に閉じ込められると嫌気が差してきてね。我々の中の一人が監視の者を全て暗殺し、シエルターの外に出た。行き先は、我々がここに来て以来通っていた、麻薬の草原。いつものように麻薬を集めていると、隅のほうに見たことのない草を見つけたのだ。それを試しに使ってみると、どうということだろう。ここにくるまで苦痛の種になっていた体を刺すような太陽の紫外線が急になんともなくなった。コンピューターに精通している者が後でそれを調べてみると、その草は全世界で未登録のものだった。我々は、その草に名前をつけた。

サン・ライズ、日の出という意味だ。世界が暗黒に包まれる中で、自分達だけが太陽の光を浴びて生きている。まさに神聖な者であると信じ込んでね。

「それじゃあ、僕らの命は……」

「ああ、急速に、かつ確実に死へと向かっているだろうな」

「そんな……」

哲也は自分の顔から血の色がなくなっていくのがわかった。

「お前は今まで何の病気にもかかったことはないが、それは表に見えないだけだ。きつと、お前の中には何かの病気が蝕んでいる」

哲也はもう何も答えることができなかった。ラムルは、そんな哲也に向かって話を続けた。

「今、お前も私も含めて、この地に二本足で立っている奴は、かな

りの強運の持ち主といえるだろう。まあ、人生は博打だと言う時代もあつたんだ。このくらいなんてことはないだろう？」

愉快そうに笑うラムルに、哲也の中の何かが音を立ててキレた。「この位ですまされる問題じゃない！親父は人としてしてはならないことをしたんだぞ！？しかも身内の人間だけじゃなく、この街の人間全員に！僕は親父を人として尊敬していたのに、最高の科学者だと信じていたのに……！」

哲也はいたたまれなくなり、部屋を飛び出した。ラムルはそんな息子を追いかけようとせせず、ただ微笑するだけだった。

「完全に嫌われたかな？」

小さく笑い続けるラムルに、正史は「当たり前だ」と吐き捨てた。「彼がさっき言ったようにお前は人として、してはならぬことをしたんだ。お前のせいで何百人という人間が死んでしまっただぞ！俺はもうこれ以上、死人を出したくなんかないのに！」

「綺麗ごとをほざくな！！」

ラムルが初めて叫んだ。

「もう死人なんて見たくないだど！？人はいつかは絶対に死ぬ。それが遅いか早いかだけなのだ！死人を見たくないなど、偽善者の語る絵空事でしかない」

「貴様……」

怒りをあらわにする正史を、ラムルは鼻で笑った。

「世の中には人としての生よりも大事にしたいと思うものがあるのだよ」

「それが、哲也君に太陽の光を見せることだというのか？」

ラムルは何も言わなかった。

「その代償があの子の命だというのか！？」

正史の怒りがさらにエスカレートする。

「そうだ」ラムルはそう言って頷いた。

「あの子には勉強より何より、この地球の歴史を知って欲しかったのさ。我々は、そして我々の祖先達は、こんなすばらしい世界で暮

らしていたのだということを知。それを知るための代償が命なら軽いものさ」

「貴様は狂っている。今の彼らにとって、どんなに太陽の元で暮らすことが必要であったとしても、それと引き換えに命を失うなんてむごすぎだ」

「それでは、貴方はあの子達に太陽の心を教えずに人生を歩ませるといふのかね？それであの子達が完璧な人間になれると思うか？」

「この世の中に完璧な人間なんて存在しない。俺は、あの子達から太陽の光は奪わせない。そのためにも俺は研究を続ける。そして、以前のように誰もが太陽の下で暮らせる世界を作る」

「所詮は口だけの若僧か。自分の夢に飲まれて無様な死を遂げるがいい」

ラムルの挑発に、正史は何も言わずに部屋を出ていった。

「息子をよろしく頼むぞ、藤宮博士」

しかし、肝心の正史は既にこの部屋にはいなかった。

STAGE 6

STAGE 6 〈サン・ライズ〉

訳もなく走っていた。

ただ、がむしゃらに走り続けた。

信じたくなかった。自分の父親がまさか今の今まで自分を騙し続けていたことを。

信じたくなかった。この街が所詮は夢の物語の虚構の街であることを。

哲也は気がついたら公園に来ていた。なぜ公園に来ていたのかはわからない。なぜかはわからないが、ここなら自分を慰めてくれる気がした。

自分がこの街に来たときからずっと街を見守ってくれていた大樹（お前は、全てを知っていたのか？）

哲也は大樹の幹に手を当て、問うてみるが、もちろん答えなど返ってくるわけがない。

（そういえば、親父と会ったのもここだったな）
大樹に手を当てる哲也の中にあの頃の記憶が蘇ってくる。

十二年前の雨の日、僕はこの場所であの人に拾われた。僕は自分がどうして捨てられたのか覚えてはいなかった。

「こんなところで何をしているんだね？」

あの人と話しかけてきた。

僕の答えは「別に……」だった。今思うと、昔の自分はかなり無愛想だったのだな。

あの方は、最初に僕にそう問いかけるだけで一向にその場を去る

うとはしなかった。しかも腹が立つことに、大樹の周りに咲く花達を見ながらニコニコと笑っていたのだ。

「あなた、花がそんなにおかしいかよ？」

あの人は「いいや」と小さく首を振った。花を見て笑っているのではないということは当然、笑われている対象は自然と僕になるわけ。

「そんなに俺がおかしいかよ？」

僕はありったけの怒りをぶちまけてやった。

あの人は面食らったような顔をしていたがやがて小さく首を横に振った。

「いいや、私は君に笑顔と言うものを教えてあげようと思っただけ。どうだ、私の家に来ないか？」

今思うと、なんでだろうって思う。僕はあの人に反発することなく、なんとというか自然にあの人を追いかけていた。この人なら信用できると、僕の直感が言っていたのかもしれない。

「ここが君の部屋だ」

あの人は家に着くなり、僕を空き部屋に案内した。

「どういっつもりだ？」

僕は当然言い返した。いきなり家に連れてこられたと思っただら、空き部屋を指して「ここが君の部屋だ」なんて言われて不振がらない奴はいないだろう。

「どういっつもりもさっき言ったとおり、私は君に笑顔を教えるのだよ。そのためにはまず一緒の家で暮らしてどういっつもりに笑うか研究せねばなるまい？」

あっけらかんと言い返され、僕はしばらく次の言葉が出なかった。しかし、ここで反発して家を追い出されたら、僕だっただまらなかつたので、この場は黙って言うとおりにしてやった。

「欲しいものがあればいつでも言いなさい。すぐに揃えてあげよう。それから、この街に住む上はこの薬を飲むのを忘れてはならんぞ」「わかっている。明後日までは毎朝一粒、それ以降は四日間一粒

でいいんだろう?」

僕がすらすらと答えると、あの人はいつと白い歯を見せて「そのとおり」と言つて笑つた。そのときの僕にはどうして、この人が笑つてのか理解ができなかった。

「この薬には紫外線を防ぐ膜を張るものだ。決して忘れてはならんぞ」

あの人はそう言つて僕を部屋に残して出て行つた。あのときの僕は、知らない人間に世話になるくらいなら死んだほうがマシだと思ふ性格だつた。なのに、僕はなぜそれをしなかった。どうしてだろう、不思議とあの人が信頼できた。そして、僕はあの人の息子代わりとなつた。あの人からいろんなものを見て、笑い、時には泣くことも教わつた。そして、一緒に生活するようになってから一カ月後には、僕の感情はその時の同年代よりかは劣つていたものの、充分感情豊かにはなつていた。しかし、そんな僕に一回目の不幸が訪れた。あきちゃんがかつたあの病気に感染したのである。彼女ほど激しいものではなかったが、楽なものではなかった。病院にも入れられたが、見舞いに来るのはもっぱら役場の人間と少ない友達のみだつた。入院中、あの人がきてくれたことは一度もなかった。やつときてくれた時は、既に病気が治りかけのときだつた。この時ほど悲しかった時はなかった。

僕はその人をなじりになつた。これでもかというくらい怒声を浴びせた。わずか六歳とは思えないほど汚い罵り言葉も使つた。しかし、あの人は何も弁解すらしようとしなかった。退院してからも半年くらいは冷戦状態が続いたが、その後はまた元通りの鞆に収まつていた。

そう、あきちゃんのかかつた病気、あれは病気なんかではなかったんだ。あの薬を飲んだときに起こる副作用だつたのだ。僕の時は一ヶ月に達する前に回復したから、彼女もそろそろ完全に回復するはず。早く博士に知らせよう。

僕は大樹から離れようとして、動きを止めた。

今、このことを伝えに言ってどうする。現に博士はあきちゃんの病気が薬の副作用であることは気づいていた。となれば、僕がいまさらのこのこと伝えに行く必要性は皆無だ。

それに、この街の秘密を知った博士はすぐあきちゃんを連れて、シエルター内の研究所に戻ってしまっただろう。

「何を言ってるんだ、これでめでたしめでたしじゃないか」

僕は嘲笑めいた笑いを浮かべた。そうだ、これでめでたしなんだ。この街は滅び、博士達は真に太陽の世界で暮らすために、より一層研究に励むだろう。これでいいんだ。いいはずなのに、なぜだろう。僕の心の中はとても寂しい気持ちでいっぱいだった。誰かを想いつづけることよりも誰かに忘れられることのほうがよっぽど辛い。そのことを僕は知っていたからだ。果たして、彼女の心の中に僕という存在は残ってくれるのだろうか。

カサ。ポケットに手を入れると、中から何か音がした。取り出してみると、十数個が対になっているカプセルのようなものがいくつも出てきた。

「これは博士がくれた薬？」

そういえばどうして博士は僕にこれを託したのだろう。あきちゃんに飲ませるなら、役場に行く前に直接彼女に渡せばよかったのに。ふと、僕の頭の中に博士の言った言葉が思い起こされた。

「そうだ、博士は僕にこれを飲むようにと言っていた。いつたい、どういうことだ？」

「それが、貴方の未来への道しるべとなるからよ」

「誰だ！」

僕は突然、周囲から聞こえた声に声を低くして叫んだ。

「貴方もあきから聞いたんじゃないかしら？私の名前」

「え？」

僕は必死にあきちゃんとの会話を思い出した。そういえば、彼女の母親の名前を聞いたことがあったような。名前は確か千春と言っていた。

「大正解」

その声は嬉しそうに言うと、その正体を僕に明かした。

一瞬、僕は目を疑った。目の前に突然現れた人は……

「浮いている？」

そう、彼女は浮いていた。正確に言うと、下半身にあるべきはずのパンツがそこにはなかった。

「まさか……幽霊？」

僕が驚きながら言うと、千春は嬉しそうに「ピンポン」と明るく答えた。

「何と私は幽霊なの。でも、悪霊とかじゃないわよ。ちゃんと幽霊界の人をお願いして、ある目的のためにやってきたの」

幽霊界？なんだか話が違う次元に移ってきてるような……

「ふうん、貴方があきの言っていた哲也君ね。あきの言っていたとおり感じよさそうな少年じゃない」

呆然としている僕を尻目に千春はしきりに僕の体をじろじろと見ている。

「ちょっと貴方いきなりなんですか。人の体をじろじろと見て！」

「あきの決めた人はどんな人かな」とか思ってたよと精神のほうまで見てきちゃった」

精神のほうまで見てきただつて？なんだか頭が痛くなってきた。

これ以上この人（？）に関わるのはよしたほうがいいかもしれ無い。心の中の僕がそう悲鳴を上げていた。

「失礼ね。人を変質者呼ばわりしないでよね！」

なっ！？今考えていたことを読まれた？そんな馬鹿な。

彼女はそんな僕の考えをまたも察したかのように「幽霊って便利よね。人の心の中まで簡単に読めちゃうんだもの」と悪戯っぽく笑った。

こうなつてはもう逃げようがない。僕は仕方なく千春が現世に来た理由を尋ねた。

「あきにちょっと用事があったの。それで君にさっきしたみたいに

心の中にいって、会話をしてきたのよ。あの子も最初は貴方と同じような顔をしていたわ」

千春はクスクスと笑った。

ピピピピピ。突然、甲高い音が僕らの周りに響き渡った。どうやら僕の携帯電話ではないみたいだけど…？

「あ、もしもし」

僕の目の前にはまたも信じがたい光景が飛び込んできた。

(幽霊が携帯を使ってる)

と言うか、幽霊って透明だから物体をもてないんじゃないかなかったですか？

やばい。僕の現実感がどんどん薄れていく気がする。小声だから、何を話しているのかは僕にはわからないが、彼女の表情から察するに、あまりよいことではないようだ。

千春はため息をつきながら携帯電話をしまいこんだ。(どこに、とはちよつと言えない)

「ふう、せつかく君と出会えたけど、もうお別れが来ちゃった。残念」

千春は心底寂しそうに言った。

「どういふことだよ？」

僕が言うと、千春は簡単に理由を説明してくれた。どうやら、幽霊が現世にとどまれる時間はあらかじめ幽霊会とやらで定めてあって、彼女はそれをすでに二分オーバーしているらしいのだ。

「二分くらいおまけしてくれたっていいじゃない！ねえ？」

うゝむ、問題はそこでよいのだろうか？

「じゃあ、私はもう帰るけど、一つだけ。君、早くそれを飲まないと本当に取り返しのつかないことになるわよ」

「ちよつと待ってよ！これを飲まなかったら僕はどうなるんだよ！？」

「二度とあきと会えなくなるわ。それでもいいならそうしなさいな」
千春は最後に脅迫めいたことをつばやいて、虚空へと消え去った。

千春の消えた空を見つめながら、哲也は呆然としていた。いや、半分は呆気に取りられていた。何せ、幽霊に脅迫された人間など、人類史上初の出来事だったからだ。そもそも二十五世紀に実際に幽霊を見たという事実のほうがすごい。

混乱した頭を静めながら哲也はゆっくりと西へ沈みつつある太陽に目をやった。

(僕はあの娘のために太陽を捨てることができるのだろうか……)
眩い星の中央にあきの顔が写る。

「こんなところにいたのか」

不意に声をかけられ、肩が震えた。

「親父……」

「急に飛び出したと思ったたらこんなところではけつと宙なんぞ眺めおつて」

「少し気持ちの整理をしていたただけだ。それより藤宮博士はどうした？」

「彼ならとつくにあきさんのもとへと帰ったよ」

「そっか……」

哲也は素っ気無くつぶやいた。

「いいのか？」

ラムルがつぶやいた。

「あの娘をこのまま帰しても」

「別に……僕と彼女では生きる場所が違いすぎたんだ。一緒にはいられない」

哲也の感情を押し殺した言葉をラムルは鼻で笑った。

「お前がこんな虚構の世界で生きるのはまだ早すぎる。だからこそ、博士はお前に道しるべをくれたんじゃないか。それを無にするということは、博士の期待を裏切るのと同じだぞ？」

哲也は何も言わず山の陰にほとんど隠れて光を放つだけの太陽に目をやった。

「こんなまやかしの光を信じるな。博士の言ったとおり、まやかしは所詮まやかしなんだ。お前にそんな世界で生きていて欲しくは……ない」

「でも、親父……」

「私のことは気にするな。お前に対してのせめてもの償いで、私は太陽の元に逝くでしょう」

ラムルは膝から一気に地面に崩れ落ちた。

「嫌だ！死ぬな、親父！！」

泣き叫ぶ息子の頬を伝わる涙を手で隠すように覆いながらラムルは微笑んだ。

「そんなしょぼくれた顔をするな。人はいつか必ず死ぬ。お前もその悲しみを乗り越えなければならん」

哲也は必死に首を横に振った。ラムルを叱ってやりたかったが、口から出るのは嗚咽だけだった。

「前へ進め。お前と、お前の決めたパートナーと共に。私の死を決して無駄なものにするんじゃないぞ」

大樹の幹を枕に、ラムルは永遠の眠りについた。

太陽が沈み、暗闇を星が照らす中、哲也は永劫とも言える時間、父親の手を握って泣いていた。

Ten Years Later

「あき、そこに置いてあるウイスキーの小瓶をくれないか？」

あきは小さく頷き、墓石においてあるウイスキーの小瓶を手渡した。哲也は小瓶を受取ると、それを墓石の上から掛けた。

（もう十年か……親父、ちゃんと見てるかい？）

哲也はふつと空を見上げた。今日は雲ひとつない快晴で、太陽は眩いまでに輝いていた。

（ここまでくるのに十年もかかっちゃったよ）

「ハハハ、かかり過ぎちゃったかな？」

「哲っちゃん、何か呼んだ？」

「いや、なんでもないよ」

哲也は後ろで待っているあきに優しく微笑んだ。

「お義父さん、元気にしてた？」

あきの問いに哲也は小さく頷いた。

「もう十年も経つのねえ」

あきは遠い目で空を見上げた。

「ここまでくるのは本当に長かったね。でも、哲っちゃんが、お父さんが、皆ががんばってやっと守ったんだよ」

「うん。そして、あき、いつも君が側にいてくれた」

「うん……」

あきは小さく頷いた。

「私、今すごく幸せだよ」

「それは僕も同じさ」

二人の男女は、墓に向かって手を合わせた。

（僕は本当に幸せ者だ。自分の決めたパートナーと一緒にいられて人がまた、太陽の下で暮らせるようになって。でも、やっぱり親父がいないのは寂しい）

「そんなしよぼくれた顔をするんじゃない。私はお前が幸せであるなら満足だ」

「あき、彼と仲良くやるのよ。少々のことは大目に見てあげるのが

いい女の「コッだからね」

「「!!」」

あきと哲也は同時に空を見上げた。

「哲っちゃん、今ね……」

「うん、聞こえた……」

「お母さん達に励まされちゃったね」

「ああ……」

哲也は恥ずかしそうに後ろ頭を掻いた。

「いつまでも後ろばかり向いてられないよな」

哲也は物言わぬ墓石に向けてにっこりと微笑んだ。

「さあ、行こう！これからは僕たちの時代だ！」

「うん!!」

今、二人の若者は未来という名の街へ向けて旅立った。

二人の若者が気づくことはあるだろうか。彼らそのものが人々にとっては太陽だということに。

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8015a/>

太陽が見える街

2009年3月22日07時41分発行